平成２３年度　第２回道徳教育について考える会　協議概要

日時：平成２３年１１月７日
１３：３０～１６：３０
場所：ピュアリティまきび

協議題

（１）　高等学校における社会貢献活動を通した道徳教育の在り方
・社会貢献活動の意義
・社会貢献活動の課題と考えられる解決策　等

（２）　「『心豊かなおかやまっ子』育成のプロセス（仮題）」の検討
・目指す子ども像に向けた、就学前から高等学校までのつながり
・特に、道徳の内容項目のない就学前と高等学校段階の内容
・具体的な体験活動や取組の実践例、方策　等

（１）　「『心豊かなおかやまっ子』育成のプロセス（仮題）」の表の検討（参照：資料１）

《幼稚園での取組》

・　幼稚園でも、実体験が少ない子どもが多いので、自然の中での体験をしっかり取り入れるようにしている。また、周りの人とかかわりをもつような活動にも進んで取り組んでいる。例えば、大学生や専門家と連携した活動や地域の公共施設との連携など、いろいろな体験活動を行っている。
・　子どもたちは、言葉が未熟なため、トラブルの時に手が出たり言葉の使い方を間違ったりすることが多い。そこで、言葉を豊かにするために絵本を通した取組を行っている。絵本の読み聞かせを行うとそれが家庭内の話題となり、子どもがテレビから遠ざかるきっかけになるだけでなく、家庭との連携のきっかけにもなる。
・　子どもたちは、自然の中で遊ぶよりも、家の中でテレビやＤＶＤ、ゲームなどの機械音に接することが多い。そのため幼稚園では、教師が生の声で子どもたちに語りかけることを大切にしている。

・　高校生の規範意識の希薄さがよく話題になる。高校生を見ていても、就学前からの家庭生活で規範意識が形づくられているということが分かる。就学前の子どもたちの規範意識は、どのように育っているのか。また、就学前の子どもたちの保護者の意識はどうか。
・　幼稚園では規範意識は遊びの中で育つ。遊びの中で自分たちできまりを作る活動や、きまりを守った方が楽しく遊べるという感覚を通して育ってくる。しかし、子どもたちは保護者の影響を大きく受けるので、モデリングや情報発信による保護者の啓発は欠かせない。

《家庭・地域と学校園とのつながり》

・　野外活動は、多くの危険が伴うため縮小されてきていると思う。しかし、子どもたちには多くの体験をさせたい。そのためには、親に対するリスクマネジメントをしっかりして、どんどん体験の場を増やすようにするべきだ。
・　家庭において子どもと接する時間の長い親の道徳性が重要だ。親の教育や啓発が学校園に求められる。保護者に学校に近づいてもらい、保護者と連携し、信頼関係を結ぶことを考えなければならない。
・　若い親は不安が多いので、「これだけのこと（例えば、返事、あいさつ、くつをそろえる等）ができたらいいよ。」と分かりやすい言葉で伝えて、安心して子育てができるようにすることが重要だ。
・　今、幼児教育が変わってきている。保育時間が長くなり、保護者とゆっくり話す時間が取りにくくなっている。

・　就学前の子どもの親にとっては、保育所や幼稚園、保育士や教師が心のよりどころとなっていることが多い。ところが、就学前はそうであったものが、どこかの段階でそうでなくなってしまう。
・　子どもの変化に気づけない、あるいは、気づかないふりをする親が多い。これは、親に指導をする必要がある。大切なのは子どもをよく見ることで、これは気をつければ誰でもできることだ。
・　校園庭開放や懇談会などでは、母親だけでなく父親も参加しやすい時と場を提供すべきだ。そして、学校園での子どもの様子を積極的に保護者に伝えていくべきだ。そうすることによって保護者に安心感を与えることができる。学校園とのつながりを学校園側からの働きかけでつくる必要がある。
・　保護者や学校園だけでなく、地域とのかかわりもとても重要。家庭を中心とした地域全体で子どもを見ていかなければならない。
・　子どもたちの生活の様子を地域の人たちに興味をもっていただくと、いろいろなところでつながりができやすくなる。

《全体を通して》
・　人間の生活は言葉が基本であり、言葉を大切にすることは道徳教育の基本である。もっと言葉にこだわるべきだ。
・　この表が就学前から小・中学校へ、そして高等学校から高等学校卒業後へとだんだん上がっていく「積み上げ式の図」になると分かりやすい。
・　「感謝の心」も入れてほしい。人間は一人で生きているわけではなく、周りの人とかかわりながら生きているので、感謝の心を忘れないことが大切だ。
・　「生きる力」は、知・徳・体のバランスをもって成り立ち、それぞれの発達段階によってその具体相が違ってくる。「生きる力」の三つの柱の中から、道徳教育に一番結びつきの深いのは「豊かな人間性」なので、「生きる力～豊かな人間性」と入れる。
・　豊かな人間関係を構築するには、子どもが安定感をもつことが大切だ。愛されて存在しているという思いが安定感に結びつく。
・　方策の主語は何か、何をどうするかということがはっきりしていない。見て分かるように整理して、表記を統一するべきだ。

（２）　高等学校における社会貢献活動を通した道徳教育の在り方（参照：資料２）
・　社会貢献活動の証明書や賞状のようなものを学校として出してはどうか。証明書や賞状をもらうと子どもたちは、やる気が出たりモチベーションが上がったりするので、そういうものがあってもよいのではないか。
・　校内での表彰はないが、学校の活動として表彰してくれる団体は結構あるので、生徒のやる気のためにもどんどん利用すればよいと思う。
・　社会貢献活動は、やってみることに意義がある活動だ。はっきりとした見返りがなくとも、身体を動かす気持ちよさを高校生に分かってもらう活動といえる。
・　高等学校は、毎日毎時間が道徳教育である。社会貢献活動は、年間計画の中の道徳教育に位置付けて、年間を通して行っている。
・　数少ない体験を通して、その体験をその子がどう受けとめるかが重要である。体験によって子どもが感じたことを受けとめてやれる大人の力が必要となる。形だけではなく、内容や質の面の受け皿を学校側がきちんとつくって、意義のある活動にしてほしい。
・　中学校のチャレンジワークからのつなぎを大切にするべきだ。
・　平成２５年度に全面実施となれば、社会貢献活動について事前に受け入れ側に周知しておく必要がある。地域が受け皿となるので、うまく実施するためにも、学校側や県教委側からの活動についての事前説明が不可欠であろう。